

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

太平洋地域の人類学的研究の最前線

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-09-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 深川, 宏樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008484

太平洋地域の人類学的研究の最前線

太平洋地域の人類学的研究は大まかに、親族論・贈与交換論から儀礼論・象徴論へと推移し、それらを貫くジェンダー論が現れ、それと時期的に重なるようにポストコロニアル研究（表象の政治学、文化の客体化論、歴史人類学など）が進展した。しかし、それ以降は全体として研究テーマが拡散し、その動向を単一的な理論的潮流のみで把握するのが困難な状況となっている。

こうした状況下、筆者は2017年2月にハワイ（カウアイ島）で開催されたオセアニア社会人類学会（Association for Social Anthropology in Oceania）第50回研究大会に参加し、そこで諸々のテーマに通底する理論的潮流が生じつつあることを確認した。その第1は、表象から物質性やエージェンシーへの関心の移行であり、第2には広義の象徴論（アイコン・インデックス論）の理論化があげられる。

第1の点は、パネル「太平洋の諸文化における制作と真正性」に具体的に表れていた。その事例報告によれば、ニュージーランドのオークランド戦争記念博物館でツバルの物質文化の展示を行い、その展示を実際にツバルの長老らに見せたところ、その反応は非常に好意的なものであったという。興味深いのは、発表後の議論で会場から「ツバルの文化を正確に表象しているか否かは問題にならないのか」と疑義が呈された際に「これはツバル人からオークランドの博物館への贈与物」とみなされており、その限りにおいて「正統である」と考えられていると回答されたことである。つまり、真正性の基準が、文化の表象とその正誤、文化を代表する主体とその権利にではなく、物質（文化）の贈与と交換関係の適切さに置かれているというのである。これは、物質文化の真正性の議論を、表象＝代表（representation）理論の呪縛から解き放ち、贈与交換論へと創造的に拡張する道を示している。クラ財の例に顕著なように、太平洋地域の物質文化を構成する貴重財は、親族と交換の歴史を再現する（represent）ことによってではなく、関係を「より深く」「より遠くまで」創ること（making）によってその正統性や真正性を獲得するのである。

第2の潮流は、パネル「アイコン的な

もの——^{アフターライフ}後の生、新たな始まり、帰帰」に端的に表れていた。このパネルは従来の文化概念が過度に言語モデルに依拠していた点を批判し、物質・身体・情動を中軸に据えた理論構築の必要性を説くものであった。議論の俎上にあげられたのは、西欧におけるサモア人・マオリ人ディアスポラの建築物を構成するアイコンである。建造物の一部を成すアイコンの特質は、単純化されたモチーフや形態の

反復を通じた文化的意味の（言語を介さない、物質・身体・情動レベルの）無媒介的な（unmediated）伝達にこそある。当然、共通の出自やアイデンティティ、移住の歴史についての集合的記憶などは言葉で語られることで共有されるが、アイコンはそうした言語的な意味を特定の物質的様式へと変換し、海を越えて広く流通させ、長期にわたり持続させる。「起源の地」から離散したサモア人・マオリ人移民の共同性を考察するにあたっては、過去と現在、彼方と此方とをつなぎ、集団帰属の感情を絶え間なく喚起するアイコンの効果をいかに理論化するかが鍵となっている。

また別のパネル「太平洋の想像上の人びと」では、インデックス論の観点から、霊的存在についての議論がなされた。これも第2の潮流を反映するものといえる。太平洋地域において祖霊や精霊、悪霊などの不可視の存在は、景観に何らかの物理的作用を及ぼしたり、人間に身体的作用をもたらしたりするなどの効果から、地域特有の因果的推論を辿って、その実在を認められている。そうした効果とは人間、諸物、景観の間の因果の一部を成すため、不可視の存在は、それらの「間」あるいは「ネットワーク」のうちに実在性をもつことになる。とくに、たとえば祖霊の力を引き出す



オセアニア社会人類学会第50回研究大会が開催されたカウアイ・ビーチリゾート・ホテル（2017年2月、ハワイ）。

儀礼のように、不可視の存在（及びその力）を能動的に可視的な世界に導き入れる場面においては、因果のネットワークの確立の定型性と、同ネットワークのパフォーマティブな構築が有する創造性（即興的な効果最大化の試みなど）とがいかに関連しているかを明らかにすることが理論的な課題となる。

以上の議論はがいて、人類に普遍的言語の分類能力による世界観（表象）の構築ではなく、人間、諸物、環境の実践的な関与の連関から切り離しえないエージェンシーのあり方を考察するものである。またこれらは、物質や言葉の意味を、単数性（singularity）においてではなく多数性（multiplicity）のうちに捉え、その立ち現れ（emergence）や成立化（enactment）を理論化する視座に通ずるものであろう。

文・写真 深川宏樹

京都大学大学院人間・環境学研究科日本学術振興会特別研究員PD。専門は文化人類学、オセアニア地域研究。論文に「身体に内在する社会性と『人格の拡大』——ニュージーランド高地エンガ州サカ谷における血縁者の死の重み」『文化人類学』81(1): 5-25 (2016年) などがある。